

世紀転換期の詩人ルートヴィヒ・ヤコボフスキー

—— その生涯と活動 ——

瀬 戸 武 彦

(人文学部独文研究室)

Ludwig Jacobowski, ein Dichter der Jahrhundertwende

Sein Leben und sein Wirken

Takehiko SETO

(Deutsches Seminar, Humanistische Fakultät)

はじめに

ルートヴィヒ・ヤコボフスキー (Ludwig Jacobowski 1868-1900) は今日ほとんど顧みられることのない、忘れられた詩人である。ごく僅かのものを除いて、その作品に接することもはなはだ難かしい¹⁾。しかし、世紀末ベルリンに生き、19世紀最後の年に32歳にして世を去ったヤコボフスキーの活動は多彩にしてかつ多産であった。死後友人のルードルフ・シュタイナーによって編まれた一篇を含めて詩集五篇、小説二篇、戯曲四篇、その他短編集五篇、評論二篇、政治的著作四篇のほか、四つの詞華集の編纂を手がけ、当時の有力雑誌『社会²⁾』の共同編集責任者のかたわら100を越す書評、小評論の類をもものした。短い生涯の晩年には文学サークルを結成するなど、あたかも早世を予感していたかのようであった。事実ヤコボフスキーの生涯は、強度の斜視と言語障害という二重の身体的ハンディキャップを背負い、加えて身边では肉親、友人、恋人の死が次々に起こるなど暗い運命におおわれていた。しかしそうした苦しみにも増してヤコボフスキーの生に重くのしかかったものは、ユダヤ人としての出自による苦悩であった。初期の作品ではあるがヤコボフスキーの代表作となった小説『ユダヤ人ヴェルテル』(Werther, der Jude) は、ドイツ文化の中でしか生きる術のなかったひとりのユダヤ人学生の苦悩とその悲劇的結末を描いて大きな反響を呼び起こした。当時、ドイツの中でも、とり分けベルリンで激しく吹き荒れた反ユダヤ主義に対しては強く抗いながらも、ドイツ文化とユダヤ精神の融合を願ったヤコボフスキーの模索の道は、晩年の『ローキー、ある神の物語』(Loki, Roman eines Gottes) という北欧ゲルマン神話に素材をもつ小説やいくつかの詞華集の編纂という形をとって現われた。

近年ドイツ・ユダヤ精神史の側面から、ヤコボフスキーに光を当てる試みもなされている³⁾。更にヤコボフスキーは、その編になる詞華集『近代ドイツ精選国民詩集⁴⁾』が、上田敏が訳詩集『海潮音』に収めたドイツ詩の訳出に際して用いた原テキストと目されることから、わが国とも無縁ではない⁵⁾。しかし、これまでヤコボフスキーの紹介はほとんどなかったといってもよい⁶⁾。そこでここでは、ヤコボフスキーの生涯と活動について触れることで紹介の一助としたい。

1. 生い立ちから大学入学まで

ルートヴィヒ・ヤコボフスキーは1868年1月21日、東プロイセンのポーゼン州の郡庁所在地シュ

トレルノ (Strelno) という、当時はロシアとの国境に近い町でユダヤ人の両親の間に三男として生まれた。後に第二人が生まれ、男ばかりの五人兄弟で育った。父親は当初、行商を主とした小商人で、生活は決して楽ではなかった。母親の方は病弱で床に臥せることが多く、家の中はひっそりと静まりかえるような様子であったらしいことは、「家族」と題された詩からも窺い知ることができる⁷⁾。

ヤコボフスキーが6歳の時の1874年、一家はベルリンへ移住し、父親は製靴業を営むことになって暮し向きも少しは楽になった。この年、ヤコボフスキーはプロテスタント系の学校に通い始め、三年後の1877年には実科高等学校へと進む。勤勉で学業成績も良い模範的生徒であった。しかし二年後には急速に勉学意欲が衰え、成績もみるみる下降し、ついには元の学校に戻されることになってしまった。こうした事態に陥った原因は生来の斜視に加えて、吃りのくせが強く現れたせいである。それまでも周囲の友達からはことあるごとにかかわられていたであろうが、幼ないうちにはさほどでないことも、11歳ぐらいになって心に深く傷ついたことは想像に難くない。更に、この頃から次第に世を騒がし始めた反ユダヤ的風潮の影響から、ユダヤ人として級友達に折りに触れ嘲りを受けていたことも少年の心に傷手を与えずにはおこななかった。しかも、ヤコボフスキーの運命にたちはだかるものが別な形でも現われ始めた。1881年には、20年もの長い間病いと闘っていた母親が世を去り、ほどなくして最も親しい友をも失った。ヤコボフスキーはその後も、短い生涯のうちに身近にいる者たちの死に次々と直面することになるが、このことは、自身の生も長くは続かないのでは、という暗い予感を抱かせるようになるのである。このようにヤコボフスキーには身体上の障害、ユダヤ人としての出自、そして早世への不安といういわば三重の苦悩を背負うことになり、結局それは生涯にわたって消えることがなかった。

さて、元の学校に戻されると同時に吃りを矯正する施設にも通い、斜視を直す手術を受けたが、そのいずれも完全に克服されたわけではなかった。吃りのくせはそののちも時に強く現われ、斜視も晩年には一層顕著になったのである。しかしともかく、一時的には状態も良くなって勉学上の支障も軽減されると、1822年には実科高等学校に復帰し、優秀な生徒の列に再び戻ることができた。ヤコボフスキーが文学の世界へとひきつけられていくのはこの頃のことである。それはある意味では自然の成りゆきとも言えるかもしれない。いきおい内面的な、精神的な世界、文学的世界へ目が向いて行ったのである、かといって、ヤコボフスキーが人との関わりを忌避するとか、人間嫌いになったということではない。それどころか、ヤコボフスキーがその人生において実に多くの人々と関わりをもったことは、後に触れてゆく生涯の軌跡が如実に語っている。

ヤコボフスキーにとっての文学的世界の始まりは、活字となっているものなら新聞であれ、町のチラシの類であれ、あるいは父親が好んだ歴史もの、そして女中がこっそり手渡してくれた怪奇小説など手当たりしだいに読みあさることであった。やがてシラーの『群盗』、『ドン・カルロス』に夢中になり、その理想主義に感動して本格的に文学の世界に入りこんでゆくのである。それは文学に目覚めた少年のたどる一つの典型的な軌跡であったかもしれないが、また、いわゆる第二期シュトルム・ウント・ドラング期 (1884-1890) の余波を受けてのことであったかもしれない。

やがて文学上の関心は、読むことから創作へと移行し、1884年頃、つまり16歳頃からは本格的な詩作に入り、1888年には四年間の詩をまとめた『激動の時から⁸⁾』が初めての詩集として上梓された。この詩集に収められた詩は、概して暗い、苦しみをただよわせたものが多い。その事は、すでに述べたような苦悩の日々の反映を見ることができよう。

それはひとつの青春時代の溜まりたまったものである。その青春時代とは苦しみと欠乏との激しい格闘である⁹⁾。

ヤコボフスキーの晩年に互いに相識り、うるわしい友情を結んだルードルフ・シュタイナーは、詩人の死後に編んだ遺稿詩集『フィナーレ』に寄せた序文の中で上記のようにヤコボフスキーの処女詩集を評している。

2. 大学時代

1887年10月、ヤコボフスキーは口述試験を免除されて実科高等学校を卒業し、ベルリン大学に進んだ。大学では主に、エーリヒ・シュミットの元で文学を、哲学はヴィルヘルム・ディルタイに、歴史学はハインリヒ・フォン・トライチュケに学ぶが、熱心に講義に通う学生ではなかった。進学後半年にして襲った父親の死により、遺された製靴工場を長兄アルベルトと協力して営む必要があったのがひとつの理由である。父親の死後ほどなくして、四弟フェリックスも他界したことがさらに尾を引いたかもしれない。別な理由としては、ヤコボフスキーにとっては大学の講義よりも、詩人、作家達との交わりの方が重きをなしていたようである。ヤコボフスキーの最初期の書簡に、1886年2月28日付のカール・ブライプトロイ宛のものがあるが、それは、18歳になったばかりのヤコボフスキーが、ブライプトロイの編集する雑誌に評論の掲載を頼みこむ手紙である¹⁰⁾。ブライプトロイは、当時すでに名を知られる作家であったが、1886年に発表した評論『文学の革命』によって一躍名声を高めていた。初期自然主義の代表的作家ブライプトロイは、1885年 M.G. コンラートによってミュンヘンで発刊された雑誌『社会』とも深く関わり、のち1888年から二年間、ベルリンを代表する形で共同編集人ともなった。ヤコボフスキーとブライプトロイの間では、以後ひんぱんに書簡が交わされ、ヤコボフスキーの生涯のほぼ終りまで続いた。それがやがて、ヤコボフスキー自身が『社会』の共同編集人となり、若い詩人達に対して見せる理解へとつながったのかもしれない。

ブライプトロイのほかにヤコボフスキーが深く関わりをもった詩人はヴィルヘルム・アーレント、ヘルマン・コンラーディといった〈現代派〉とも、〈疾風怒涛派〉とも称し、あるいはアーダルベルト・フォン・ハンシュタインによって広くひろめられた〈最新ドイツ青年派〉とも規定されたアヴァンギャルドの詩人達であった。文学史上では自然主義の枠内に嵌めこまれているとはいえ、その底流にはロマン主義的色彩が漂い、先鋭的で、かつデカダン風でもあった。そういう詩人達にあってはひととき異彩を放っていたのはアーレント (Wilhelm Arent (1864-?)) であった。その編になる『現代詩人氣質』は抒情詩の革命を唱導しようとするもので、ブライプトロイの『文学の革命』を誘発したともいえる。熱狂的なシュトルム・ウント・ドラング期文学の礼賛者であったアーレントは、若い詩人達に少なからず影響を与えた。ヤコボフスキーもその一人であった。1891年に出されたヤコボフスキーの著作『文芸の始まり¹¹⁾』はアーレントに捧げられ、またこの年6月、ヤコボフスキーがフライブルク大学に提出した学位論文は、『クリンガーとシェークスピア——シュトルム・ウント・ドラング期のシェークスピア熱について¹²⁾』というものであった。ヤコボフスキーには生来、ロマン主義的の傾向があって、アヴァンギャルドの詩人達とも一脈通じるものがあつたが、しかし前衛に走り過ぎることはなかった。学生時代にヤコボフスキーはさらに第二詩集『新詩集〈火花〉¹³⁾』をまとめあげるが、概してリーレンクローンからの詩的影響が強く出ていと見られている。

3. 『ユダヤ人ヴェルテル』

ヤコボフスキーは1889年10月までの二年間ベルリン大学に籍を置いたのち、一年ほど、西南ドイツのフライブルクに移った。そして、このフライブルク滞在中に、代表作とされ、大きな反響を呼

んだ小説『ユダヤ人ヴェルテル』が構想され、着手された。当初は書簡体形式で書き進められたが、大晦日の夜にその草稿の全てを自身の手で焼却してしまった。一夜明けて1890年となったその元日からヤコボフスキーは再度、今度は小説形式で書き始め、僅か二週間で現在の形の八割がたに当たる第3章まで書き上げた。しかし、最後の第4章が仕上げられたのはずっとのちの、一年半ほど経てからであった。以下この小説の概略を示しておこう。

小説の舞台は主としてベルリンである。主人公レオ・ヴォルフは地方のユダヤ人銀行家の息子で、ドイツ人学生も含めて周囲の反ユダヤ的な雰囲気の中で大学生活を送る。感受性豊かなレオは、もって生まれたユダヤ人の血と、幼い頃から身につけたドイツ文化の間で激しく懊悩し、葛藤する。こののがれることのできない宿命、絶望や憤怒、恥辱の中での生活でもヘレーネという市民階級のドイツ人娘と恋に陥いる。

ある日、郷里から幼なじみでもある恩師の娘とその継母がベルリンにやって来る。レオはその二人それぞれに惹かれるものを感じ、ヘレーネとの間がしっくりしなくなる。フライブルクに居る同郷の友リヒャルトからある日、郷里でレオの父が中心になって興こした会社の経営が悪化し、株の暴落を招き、恩師を始め親しい知人達が損害をこうむったことを告げる手紙を受けとる。

レオは父の助けとなるべく郷里へおもむくが、到着と同時にこれまでの苦悩、心労から意識を失い病いに臥せる。

レオの子を宿したヘレーネは何通もの手紙を書くがレオの目に触れることがなく見捨てられたとの絶望から入水する。ユダヤ人学生の非道な仕打ちのためにドイツ人娘が死に追いやられた、との非難の記事がベルリンの新聞にのったことをレオは知ると、将来に絶望してピストル自殺をする。

以上が小説のおおまかな内容である。

『ユダヤ人ヴェルテル』がゲーテの『若きヴェルテルの悩み』を念頭にしたことは、表題からして明白である。しかし、ゲーテの〈ヴェルテル〉、つまり「ドイツ人ヴェルテルは女性への満たされぬ愛がもつて命を絶つものに対して、ユダヤ人ヴェルテル(レオ)はユダヤ精神への満たされぬ愛のために命を絶つ¹⁴⁾」といえる。ゲーテの『ヴェルテル』は、愛の情熱の中に生き、悩み、そして死を選ばざるを得ない、全身全霊で燃え尽きる一つの本性の物語である。対してヤコボフスキーの『ヴェルテル』は、ドイツ文化とユダヤ精神の間で激しく葛藤、懊悩するが、また献身的な少女と蠱惑的な女性との間で動揺するという二重の苦悩の物語である。

ヤコボフスキーの『ユダヤ人ヴェルテル』は出版されるとたちまちにして大きな反響を巻き起こした。第3版のまえがきでヤコボフスキーは「この本は実に憎悪されもし、また愛されもした。……偏見にとらわれないことを一つの犯罪と見なす人々には憎しみをもって迎えられ、作品のもつ文学的な、つまりその本質的なところに心を閉さず、主人公の性格の内に時代の典型的な面を看取った人々には愛情をもって受け入れられた¹⁵⁾」と述べているように、ベルリンの言論、批評界を二分させたといってもよいほどであった。折りしもベルリンでは、新たな反ユダヤ主義が吹き荒れていて、他方、そうした風潮に抗する一つの組織が結成され、他ならぬヤコボフスキーもその一員に加わったばかりだったのである。けれどもヤコボフスキーはその同じまえがきで、ユダヤ人問題を正面きって文学で扱うことは多くの状況から甚だ理解されにくい、とも語っている。以後、評論等では果敢にこの問題に取り組んだものの、文学作品では強く取り上げることはしなかった。

ところで、『ユダヤ人ヴェルテル』の最後の第4章の仕上げにはかなりの月日を要しているが、そ

れは1891年にまたしてもヤコボフスキーを襲った二つの死、即ち次兄の死と恋人マルタの死が係わっていたようである。マルタは、青い眼の金髪のヘレーネの姿に写しとられているといわれる。ヤコボフスキーの大学時代の後半二年は、実にこの『ユダヤ人ヴェルテル』の執筆、完成へ向けて費された年月であった。

『ユダヤ人ヴェルテル』はヤコボフスキーの生前にもフランス語訳が出版されるなど、都合6ヶ国語に翻訳され、1920年には7版を数えるほどであった。

4. 反ユダヤ主義防止協会

1891年の終り頃、『ユダヤ人ヴェルテル』を完成させたヤコボフスキーは、〈反ユダヤ主義防止協会¹⁶⁾〉という組織の事務局に入った。この協会はその年、主として非ユダヤ人の、政界、学界そして文学界の著名な人物達を擁して設立されたものである。法学者のルードルフ・フォン・グナイスト、政治家のハインリヒ・フォン・グナイスト、政治家のハインリヒ・リッカート、世界的名声を博していた歴史家のテオドール・モムゼン、小説家ではグスタフ・フライタークにパウル・ハイゼが名が連ねた。初代会長グナイストの急死で、リッカートがその任にあたり、ヤコボフスキーは当初、リッカートの秘書であったらしい。しかし、すぐに事務局のほとんど一切の仕事を手がけるようになった。

この協会は、ベルリンで高まりを見せ始めた反ユダヤ主義の動きを静めることを目的としたことから、会報、パンフレット等によって積極的な防止活動が行なわれた。ヤコボフスキーはそれらの編集の中心にあるとともに、自らも数多くの文章、論文を発表した。中でも特筆されるのは『一ユダヤ人の率直な返答¹⁷⁾』と『ユダヤ人の犯罪関与¹⁸⁾』である。前者『一ユダヤ人の率直な返答』は1891年、同年に出版されたヘルマン・アールヴァルトの『ユダヤ人の盟約』というユダヤ人中傷文書への反論として書かれた。アールヴァルトはのちに帝国議会議員も務めるが、当時は激烈な反ユダヤ主義のデマゴグであった。しかし、ヤコボフスキーの〈返答〉に対してアールヴァルトはただちに『ユダヤ人の策略』をもって応じ、双方の間で激しい論戦がくり広げられた。

後者の『ユダヤ人の犯罪関与』は、匿名による同名文書への反論である。同名の、即ち『ユダヤ人の犯罪関与』は、すでに10数年前に出版されたものであるが版を重ねて広く読まれていた。ここでは、ユダヤ人による犯罪の発生率の高さが誇張されて示されていた。そこで、ヤコボフスキーは統計上の数値をあげて、ユダヤ人の犯罪率の方がドイツ人のそれよりも低いことを明白に論証し、敢えて同名の書をもって発表したのであった。

こうしたユダヤ人中傷文書との論争のただ中であつてもヤコボフスキーの胸中に絶えずあつたものは、ユダヤ人と非ユダヤ人、つまりドイツ人との融和を願う気持であつた。その為には、ドイツ文化の中で生きるユダヤ人にとっては先ずドイツ人であり、そしてユダヤ人たる、との痛ましい結論を引き出したのであつた。更に、アールヴァルトからのキリスト教徒たるドイツ人の、ユダヤ教徒たるユダヤ人への憎悪に満ちた論にはヤコボフスキーもさすがに立ち向かうべき困難を感じていた。しかし、そこに立ち入らずしてドイツ文化とユダヤ精神の融和もありえないことも十分に理解していたのだつた。1894年、ヤコボフスキーは『キリスト教国家とその未来¹⁹⁾』を著す。この大部な論文は、1847年に出たJ. H. シュタールの『キリスト教国家と理神論及びユダヤ教に対するその関係²⁰⁾』に向けたものであるが、アールヴァルトとの論争で重くのしかかった非キリスト教徒たる故の非難を意識したものであつた。ヤコボフスキーが融和への一つの糸口としてつかんだものは、キリストは最初の社会主義者であつた、という認識であつた。このシュタールという人物がかつてはシュレージンガーという名の改宗ユダヤ人であつたことはなんと皮肉なことであつた。

〈反ユダヤ主義防止協会〉を基盤にしたこれらの活動にもかかわらず、ドイツ文化とユダヤ精神の融和をひたすら願ったとして捉えたる従前のヤコボフスキー評価は、のちに触れることになる編纂者としての仕事や、晩年の小説『ローキー²¹⁾』に起因していると思われる。しかし、ヤコボフスキー自身はシオニズムの立場に拠らなかつたが、そうした立場の人々から意外なほどに評価されていたのである。例えば、文芸評論家として名をはせた M. J. ベルジェフスキーは、ヤコボフスキーをしてユダヤ精神の為に闘う誇らかなユダヤ人と見ていたが、その根拠は『ユダヤ人ヴェルテル』がもつ意義であった²²⁾。ヘブライ語作家で文芸史家の R. プライニは「ヤコボフスキーがもっと長く生きていたら、ユダヤ民族ルネサンスのために最前線で戦っていたことだろう²³⁾」とまで言いきつた。ある一人の詩人との親密な交友とその破局は、もしかするとそういうヤコボフスキーを想像させるに十分な現象であったかもしれない。その詩人とは、「山のあなた」の詩人として我が国ではつとに知られるカール・ブッセである。

5. カール・ブッセ

カール・ブッセ (Carl Busse 1872-1918) とヤコボフスキーとの交友は、1890年6月30日付のブッセの書簡で始まる。ヤコボフスキーが友人の R. ツォーツマンを通じて、発刊準備中の文芸誌の協力者であったブッセに、予約購読者名の報告を依頼したことが契機であった。以後二人の間には親密な友人関係がつくられていった。ヤコボフスキーはブッセの異母弟で詩人の G. ブッセ・パルマとも親交を結び、一方ブッセは、ヤコボフスキーの長兄アルベルト及び末弟ハインリヒとも交際をするにまで至る。ヴィースバーデンの州立図書館に蔵されている2,000通に及ぶヤコボフスキー宛等書簡のうち、ブッセに関する分は100点を越す最大のものである。二人の間に親密な関係が生まれた大きな理由は、ブッセの生地がポーゼン州のリンデンシュタット (Lindenstadt) とヤコボフスキーとは同県人であったことであろう。ポーゼン州はユダヤ系が多かったこともあって、ブッセにはユダヤ人に対する偏見がさほど強くなかつたし、むしろ同情的であったとさえいえた。ヤコボフスキーは1895年『昼間と夢²⁴⁾』を第3詩集として出したが、これはカール・ブッセに捧げられた。

しかし二人の交友は1897年に突如として崩れ去った。そのきっかけとなったのは、1894年にフランスで起きたドレフェース事件である。ドレフェース大尉事件はフランス国内にとどまらず、全ヨーロッパを騒然とさせ、ゾラを始めとして多くの小説家もその事件には大きな関心を寄せたのであった。ブッセはこの事件が起こってただちに反応を示したわけではなかつた。恐らく、裁判が進められて、種々の反応が現われてゆく中で徐々に、ユダヤ人に偏見を、あるいはこだわりも持たなかつた人間から反ユダヤ主義者になってしまうものと思われる。交友崩壊が生じた時期やヤコボフスキーの反応についてはその詳細を知るに至らないが、1898年3月4日付のヤコボフスキーの末弟ハインリヒに宛てたブッセの手紙は、ブッセがゾラとは見解を異にし、ドレフェース有罪を断じて、ユダヤ人の策謀にも言及する反ユダヤ主義者となっていることを示している²⁵⁾。二人の間は修復不可能となってしまったが、事務的な短い通信でいどはあったことが1899年2月の一書簡が示している。それは、ヤコボフスキーから幾篇かの詩を詞華集に収める許可が求められたことに対する返事であるが、書面冒頭の呼びかけとして用いられた言葉が互いの冷えきつた関係を如実に物語っている²⁶⁾。ところで、ヤコボフスキーの求めにブッセがとくに採録を希望した一篇こそほかならぬ「山のあなた」であった。

6. 編集, 編纂者として

ヤコボフスキーの編集, 編纂の仕事としての最初は, 1890年の友人 R. ツォーツマンとの共同による『同時代人²⁷⁾』である。リーリエンクローン, ブライプトロイ, グスタフ・ファルケといった既に名を成した詩人を協力者に仰いだが, 発刊一年にして廃刊の憂き目を見た。〈現代の生活, 批評, 文芸のためのベルリン誌〉と銘うたれ, 一定の読者をつかみそうにも思われたが, 予約購読者獲得に及ばない点があったのがその因と思われる。当時は, 同人誌, 雑誌, 新聞などの新たな発行に際してはそれが欠かせないところであった。カール・ブッセに予約購読者名を照会したのは『同時代人』発刊の四ヶ月前のことであった。

編纂, 編集に関わる者の仕事に, 若い人の才能の発掘及至は評価という面もあるとすれば, ここで一人の年少の詩人との関わりについて言及されねばなるまい。

1896年2月末, ヤコボフスキーのもとに7歳年少の無名の, しかし自負に満ち溢れたある詩人の手紙がプラハから届いた。その数日前に出した自身の手紙の返書であった。差し出し人とはルネ・マリーア・リルケである。その手紙は「2月21日付の心こもった言葉の数々に応えて」との冒頭書きのあとは「稀有なることは喜び。故にわが告白を許しあれ, 汝が文にわれ喜びぬ……²⁸⁾」とソネット形式の詩で書かれていた。リルケはすでに二つの詩集を出していたが, いまだプラハの若い詩人以上ではなかった。そしてその頃リルケは, 『道向草』という同人雑誌の発刊を企てていた。〈道向草〉(Wegwarten)とはパラケルスス語るところの, 百年に一度咲くという伝説的花である。実に気負いに溢れた名前である。その第一集はリルケひとりの個人詩集の体であり, 第二集は『いま, われら死する時』と題するリルケの戯曲であって, これはプラハの国民劇場で上演された。第三集に至ってリルケは, 友人の B.v. ヴィルトベルクと新しい抒情詩の確立を目途とする詞章集をめざしたのである。採録すべき詩の選定にあたって, ヴィルトベルクはヤコボフスキーに教示を受けるようリルケに勧めたものと思われる。ヴィルトベルクは, かつてヤコボフスキーが『同時代人』を発行した折りの協力者の一人であった。こうしてヤコボフスキーとリルケの間で手紙が交わされ, リルケの先の戯曲に対するヤコボフスキーの批評への返書が前述のソネットであった。

『道向草』第3集はリルケ, ヴィルトベルクの他にヤコボフスキー, アーレント, ファルケといった詩人の詩で形づくられた。ヴィースバーデンの図書館には今日, リルケ関係では6点が収蔵されているだけであるが, F. B. シュテルンによって1967年に初めて世に知られた詩が含まれている²⁹⁾。すでに数々の作品で詩人として一個を成していたヤコボフスキーは, リルケにとって批評をあおぐなど, いわば兄事する存在であった。『アンネ・マリー, あるベルリン牧歌³¹⁾』に寄せた礼賛にも似たリルケの書評からもそれは窺える³¹⁾。

しかし, リルケとヤコボフスキーの係わりも, 1897年にリルケがルー・サロメと出会うことで急速にうすれていった。サロメとの第一次ロシア旅行から帰国したリルケは, 幼名ルネを捨てたライナー・マリーア・リルケとなり, ヤコボフスキーとは異なった世界で生きる詩人となっていた。またヤコボフスキーの方もその頃にはすでに雑誌『社会』の編集人に就き, 更に R. シュタイナーと出会うなどリルケとは違った世界を進んでいたのであった。リルケにとってヤコボフスキーとの一時期は, 青春の一コマ, 束の間の出来事であったかもしれないが, 終生忘れ難いものでもあったであろう。1924年8月, 文学者の H. ポングスがリルケに文学上の影響を受けた詩人について尋ねた折, ヤコボフスキーの名もとりあげられているのである³²⁾。

ヤコボフスキーの編纂, 編纂者としての目覚しい活動は, 1898年1月から『社会』の共同編集者

になったことから始まる。『社会』は創刊一年目こそ週一回発行であったが、二年目の1886年からは月刊の体制をとり続けていた。しかし、ヤコボフスキーの参画により月二回の発行となったのである。自らも多くの詩、エッセーを発表すると共に、書評においてその卓抜した鋭い識眼を見せた。リルケの『わが祝いのために』をとりあげた書評で「リルケは実に深い静寂の詩人である。……それも、その始まりが沈黙を、終りが死を意味する静寂の詩人である³³⁾」と評し、リルケを〈全き詩人〉とたたえている。雑誌『社会』はヤコボフスキーの死後二年目の1902年をもって、さながらヤコボフスキーの死の痛手を受けたかのようにその歴史に終止符をうった。

『社会』編集責任者の時期にヤコボフスキーは四種の詞華集編纂を手がけた。『ドイツの心——ドイツ民謡集』、『近代ドイツ精選国民詩集』、『青い花』である³⁴⁾。内最後のものはシリーズでの発行が計画され、ヤコボフスキー自身の手によっては、ゲーテ、ハイネの二集のみが出版され、死後、遺志を継いだシュタイナーによって計画にあったグリム兄弟とシラー篇が出された。ところで、この四種の編纂物は、ヤコボフスキーのある明確な意図の下に出されたものであった。つまりこれらは、詩歌におけるドイツの文学遺産の継承を強く国民に訴え、その浸透をはかるために、〈ドイツ国民のため〉に編まれたのである。まずドイツ人であり、次いでユダヤ人たる、とするヤコボフスキーの痛ましい認識の一つの具現であると考えられる。

1898年に出された小説『ローキー、ある神の物語』も上述のことと関連づけられるものである。

『ローキー』は神々の父オーディンから、不吉の子としてその母と共に神々の地から追放されたローキーを主人公としている。母親にも憎悪と敵意を抱かれて育った黒い髪、黒い眼のローキーは、やがて神々の地への復讐に向かう。金髪の見目美わしき神、太陽の子バルダーは、ローキーに顔だけはよく似ている。凄惨な戦いがくり広げられ、ローキーはバルダーを倒し、戦いに勝利したかに見える。しかし、バルダーの子によってやがて自身も滅ぼされ、真の勝利者はバルダーとなるに違いないとの絶望的認識に至る。

『ローキー』はヤコボフスキーが1896年頃から取り組んでいたゲルマン神話と『エッダ』研究の産物である。ローキーをただちにヤコボフスキーその人と結びつけることは、『ユダヤ人ヴェルテル』の主人公レオを結びつけることと同じく誘惑的ではあるが、民族の、時代の一つの典型を表わしたという視点を忘れてはなるまい。『ローキー』に一見感じとられるユダヤ人的意識の強さは、詞華集編纂行為といわば表裏一体的関係と捉えるべきであろう。

詞華集編纂にはさらに別の少しく異なる性格もあった。〈ドイツ国民のため〉という出版意図から、少しつき進んだ国民大衆の陶冶、教育という視点である。その意味から、特に『近代ドイツ精選国民詩集』と『ドイツ国民詩人選集』は価格10ペニヒ、部数10万という廉価、大量出版であった。これによって国民大衆への浸透をはかったのである。ヤコボフスキーにおけるこの教育者的側面は、人生の歩みの中で次第に培われたのかもしれないが、次章で触れるように友人シュタイナーとの出会いも関わっていると考えられる。

7. マリー・シュトナーとルードルフ・シュタイナー

32年の短い生涯でしかなかったヤコボフスキーにとってはすでに晩年と呼ぶべき1897年と1898年、ひとりの門地良き女流詩人とひとりの稀有な人格の持ち主との出会いは、苦しみばかり多かったヤコボフスキーに初めて与えられた贈り物ともいえるものだった。それは、マリー・シュトナーとルードルフ・シュタイナーとの出会いである。僅か二、三年の交わりにすぎなかったが、ヤコボ

フスキーの死後二人がそれぞれ見せたものは、思いやりと友情がいかに暖かく、強かったかを証すものである。

マリー・シュトーナ (Marie Stona 1861-1944) は、マリー・フォン・ショルツの筆名で、低地シュレージェンのトロップパウ郊外に城を構えるシュトーナコフスキー伯爵家の出であった。ヤコボフスキーより7歳年上で、娘が一人あった。自身が編んだ追悼文集『ヤコボフスキー、生の光の中で』に寄せた『思い出』によると、二人が出会うきっかけとなったのは1897年の晩秋、シュトーナの小説に対するヤコボフスキーの批評が出版社を介して送られてきたことに発している。『社会』の編集責任者にこそまだなっていないが、〈新自由国民舞台〉の代表を一時的に務めるなど種々活動していたヤコボフスキーから眼が向けられたのは、特に表立つことのないシュトーナには意外であったようだ。しかし、その後二人の間では手紙の往来が盛んになり、この年遅くにシュトーナがベルリンへおもむいた折りに二人は初めて会ったと思われる。

1898年夏、ヤコボフスキーはシュトーナからトロップパウ郊外の城へ招かれてしばらく滞在した。『思い出』には、その折りのヤコボフスキーの姿が生き生きと描写されている。ヤコボフスキーの実像をありありと語る証言がほとんど無い中で、それは貴重な資料となっている。

ある日は城の庭のカスタニエンの樹の下におかれた机に向かって、首を傾げて詩作に耽っているヤコボフスキーの姿が語られているが、その姿を遠目に眺めやるシュトーナのひそやかな心づかいを受けた城での滞在は、ヤコボフスキーのこれまでの生涯になかったやすらぎのひとつであったろう。

城の主人であるシュトーナの父と一人娘、そして城に仕えている者達の全てからヤコボフスキーは好意をもって遇された。その後も度々この城に招かれては滞在するようになるが、ただのんびり過ごしていたのではなく、部屋に閉じこもっては、またあるときは庭の机に向かって仕事をするのであった。そんな折り、シュトーナは少し体をいたわるように忠告すると「急がなくてはならないのです。もう時間が残っていないのです。33歳までは生きられないでしょう³⁵⁾」とヤコボフスキーはこたえたという。晩年に再び眼の状態が悪化し、激しい痛みを感じるがあったのである。自身の早世を早くに予感していたヤコボフスキーは、この頃には予感以上のものを抱いていたのであろう。

1900年の夏もヤコボフスキーはシュトーナの居る城に滞在していた。この時は、会うなり一見してシュトーナにはヤコボフスキーが病魔に侵かされているらしいことが感じられた。そんなある晩、ヤコボフスキーは突然辞去を告げた。その日は二人の間で文学上の意見の違いが表に出て、多少のやりとりがあったのである。この出来事はヤコボフスキーの性格を表わす類いのもものでは決してない。ひとえに病いに原因が求められるものである。「1900年になった頃からは、友人達の間にも彼(ヤコボフスキー)に変化が起こったのが明らかになって来た。それまでの快活な気分が失せて、極度に過敏に、気短になっていた³⁶⁾」と友人の一人 H. フリートリヒは語っている。しかし、城を去って一時間ほどしてからヤコボフスキーは再び戻って来た。駅頭で倒れていたところを、ちょうど来合わせたシュトーナの父に助けられ、連れ戻されたのであった。8月の末近く、翌年も一夏を過ごすことを約してヤコボフスキーはベルリンへ帰ったが、やがてシュトーナのもとに眼の手術をしたとの便りが届いた。ヤコボフスキーの死の報せがもたらされた時には、城中が静まりかえってしまった。1900年12月2日、ヤコボフスキーは脳膜の炎症がもとで、33歳を前にしてこの世を去ったのである。

シュタイナー (Rudolf Steiner 1861-1925) は1897年、ゲーテ＝シラー文書館でのゾファー版ゲーテ全集の編纂に携わるなどした、10年に及ぶヴァイマル生活を去ってベルリンへ移っていた。友人の O. E. ハルトレーベンと文芸雑誌の発行を目途としたのである。1898年2月、ヤコボフスキーとシュタイナーが女流詩人クララ・フィービヒの家で初めて会った時、二人はそれぞれの雑誌に身を置く、いわば競い、張り合う立場にあった。しかし、二人の間にはたちまちにして友人としての、あるいはそれ以上の親しいものが生まれていった。シュトナーと同じく7歳年長のシュタイナーが若くして逝った友に寄せたうるわしき友情は、やがて数々の形で現われた。

まずあげられるのは、ヤコボフスキーが死の少し前に興こした文学サークル〈来たるべき人々³⁷⁾〉を継承したことである。このサークルは、さしたる規則などはもたない、自由な雰囲気の下に若い詩人、建築家、ジャーナリスト、学生などが参集して、詩の朗読、講演、そして談話するというごく気ままなものであった。そもそも、ヤコボフスキーが拠る雑誌『社会』の編集事務室に寄り集って来た者達から自然に出来あがっていった性質のものであった。まもなく、あるカフェの二階に場所が移され、毎週木曜に開くことになるに及んで、〈来たるべき人々〉とヤコボフスキーによって命名された。メンバーの中には、女流作家のアンゼルマ・ハイネやエルゼ・ラスカール＝シューラーがあり、シュタイナーもそのひとりであった。ヤコボフスキーはそうした人々の中心にいたが、若い詩人達の動きを見守るという体であった。ヤコボフスキーが居合わせていることでサークルは自ら機能していたのである。やがて、一定の時期が経つと、少しばかり形を成したものを作り上げようとの動きが起こったが、そこへヤコボフスキーの死が訪れた。消滅しかねなかったこのサークルを継ぎ、更に、〈まとまった形〉というものを実現したのがシュタイナーであった。しかし、それは同時にヤコボフスキーを追悼するものとなってしまったのである³⁸⁾。シュテファン・ツヴァイクは、このサークルを訪ねた折りの様子、雰囲気を『昨日の世界』で報告しているが³⁹⁾、それはシュタイナーによって開かれていた頃のことである。

シュタイナーの友情は遺稿詩集の刊行とヤコボフスキーが果たせなかったシリーズ『ドイツ国民詩人選集』の続刊という形でもあらわれた。遺稿詩集『フィナーレ』のもつ意味は、未発表の詩を編纂公刊しただけにとどまるものではない。詩集巻頭に掲げられたヤコボフスキーの生涯と人間像について書かれた40頁に及ぶ文章は、序文を越えた。優に一篇の〈ヤコボフスキー論〉である。F. B. シュテルンによって本格的ヤコボフスキー研究が行なわれるまでの、最もすぐれた文献と見ることができる。

先に、ヤコボフスキーには国民の陶冶、教育の面に関心があつた点に触れた折り、シュタイナーとの関連についても言及した。実はシュタイナーは、後年人智学なるものを唱えたことで世に聞こえるが、ヴァルドルフシュール (シュタイナー学校と一般に言われている) という教育施設を独自の教育理念の下に創設したことで知られている。つまり、シュタイナーにおいてもヤコボフスキーと同じく教育の問題が大きな位置を占めていた。1899年から1904年にかけてシュタイナーはある労働者教養学校の教師を務めているが、それはまだヤコボフスキー生前中のことであり、時期的にもヤコボフスキーが〈ドイツ国民のため〉の詞華集を編んでいた頃と重なっている。一方の影響力が強かったのか、それとも相互に作用し合っていたのかは定かではないが、二人には共通するものがあつたことも友情を一層深めることにつながつたであろう。

その生涯において、貧困、障害、近親の者たちのうち続く死、自身の早世への不安、そしてユダヤ人としてドイツ文化とユダヤ精神の融和を空しく願ったヤコボフスキーの生き方は、苛酷な運命との闘いであった。ヤコボフスキーにとって生涯の最後に訪れたシュタイナーとシュトナーの二人

との出会いは、ささやかな救いで、喜びであったことだろう。

1901年の一周忌に際してシュタイナーは、ベルリン郊外の湖ヴァイセンゼー近くのユダヤ人墓地に眠るヤコボフスキーの墓前で追悼文を読み上げた。白い大理石の墓碑には、〈休みなく 恐れずに 虚心に〉の文字が刻まれていた。

おわりに

ヤコボフスキー編『近代ドイツ精選国民詩集』は10万部刷られ、その内の一冊は今日森鷗外の蔵書中に見出される⁴⁰⁾。しかもそれは、上田敏が訳詩集『海潮音』中に収めた六篇のドイツ詩訳出に際し用いた原典と考えられる。『海潮音』には全部で七篇のドイツ詩が収められているが、ハイネの詩を除く六篇はいずれも上記詞華集に見いだせるからである。その六篇の訳詩の中でも、つとに名訳として名高かく、かつよく知られているのはヴィルヘルム・アーレントの「わすれなぐさ」とカール・ブッセの「山のあなた」である。他ならぬこのアーレントとブッセこそ、ヤコボフスキーの生涯を語る上で逸することのできない詩人である。この奇しき縁のもととなった鷗外は、若き日にベルリンに滞在した。それは1887年4月から1888年10月までの一年余りの期間で、ヤコボフスキーがベルリン大学の学生であった時期にあたる。

完

注

- 1) 入手容易なものはレクラム文庫中の《Theorie des Naturalismus》と《Lyrik des Jugendstils. Eine Anthologie》に収められた評論一篇と詩三篇ほどである。
- 2) 《Die Gesellschaft》はM. G. Conradによって1885年ミュンヘンで創刊され1902年まで続いた自然主義派の月刊雑誌。
- 3) 特筆されるのはFred B. Sternの一連の研究で、とりわけ《Ludwig Jacobowski. Persönlichkeit und Werk eines Dichters》Melzer Verlag 1966. 及び《Auftritt zur Literatur des 20. Jahrhunderts. Briefe aus dem Nachlaß von L. J.》, 2 Bde., Bd. 1: Briefe. Bd. 2: Einführung, Kommentar, Bibliographie. Lambert Schneider, 1974. 更に《Juden in der deutschen Literatur. Ein deutsch-israelisches Symposium》Hrsg. V. S. Moses u. A. Schöne, Suhrkamp, 1984, Cans Otto Horch: 《Auf der Suche nach der jüdischen Erzählliteratur》, Peter Lang, 1985. があげられる。
- 4) L. J.: Neue Lieder der besten neueren Dichter fürs Volk. (Zehn-Pfennig-Heft.) Verlag E. Lietzmann & Co, Berlin 1899.
- 5) 島田謹二「上田敏の『海潮音』——文学史的研究——」(台北帝国大学文政学部文学科研究年報第一輯, 昭和九年), 安田保雄『上田敏研究——その生涯と業績——』(矢島書房, 昭和33年)及び拙稿「『海潮音』のドイツ詩原典考」(ドイツ文学論集17号, 日本独文学会中国四国支部, 1984)を参照。
- 6) 平井正編『ベルリン世界都市への胎動』(ドイツの世紀末 第4巻, 国書刊行会, 1986)にはヤコボフスキーの評論一篇の訳の小伝が収められている。
- 7) L. J.: Leuchtende Tage. Neue Gedichte (1896-1898). Verlag J. C. C. Bruns, Minden i. W. 1900, S. 218.

《Familie》

Der Vater lief von Haus zu Haus
Und lief sich fast die Seele aus,
Fünf Jungens satt zu kriegen.
Mit einem Fünzigpfennigbrot

Da hat man seine liebe Not ...
Zehn Kilo müß't' es wiegen!

Die Mutter, immer bleich und krank,
Das ging so Jahr und jahrelang;
Wir schlichen nur auf Zehen.
Nur manchmal um ihr Bett herum,
Da saßen wir und hörten stumm
Die alte Wanduhr gehen.

- 8) L. J.: Aus bewegten Stunden. Gedichte (1884-1888). E. Pierson's Verlag, Dresden 1888.
- 9) Ausklang. Neue Gedichte aus dem Nachlaß Ludwig Jacobowskis. Herausgegeben und mit einer Einleitung von Rudolf Steiner. Verlag J. C. C. Bruns, Minden i. W. 1901, S. 9.
- 10) Auftakt zur Literatur des 20. Jahrhunderts. Hrsg. V. Fred B. Stern, Bd. I, S. 41.
- 11) L. J.: Die Anfänge der Poesie. Grundlegung zu einer realistischen Entwicklung der Poesie. E. Pierson's Verlag, Dresden 1891.
- 12) L. J.: Klinger und Shakespear. Ein Beitrag zur Shakespearomanie der Sturm und Drangperiode. E. Pierson's Verlag, Dresden 1891. (Dissertation)
- 13) L. J.: Funken. Neue Gedichte (1888-1890). E. Pierson's Verlag, Dresden 1890.
- 14) Fred B. Stern: Ludwig Jacobowski. Persönlichkeit und Werk eines Dichters. Joseph Melzer Verlag, Darmstadt 1966, S. 78.
- 15) L. J.: Werther, der Jude. In: Jüdischer Novellenschatz, X, Berlin und Leipzig, 1910, S. 6.
- 16) 《Verein zur Abwehr des Antisemitismus》
- 17) L. J.: Offene Antwort eines Juden auf Herrn Ahlwardt's 《Der Eid eines Juden》 Verlag Carl Küchenmeister, Berlin 1891.
- 18) L. J.: Der Juden Anteil am Verbrechen. Verlag R. Hoffschläger, Berlin 1892.
- 19) L. J.: Der christliche Staat und seine Zukunft. Eine politische Studie. Verlag Carl Duncker, Berlin 1894.
- 20) Julius Heinrich Stahl: Der christliche Staat und sein Verhältnis zu Deismus und Judentum, 1847.
- 21) L. J.: Loki. Roman eines Gottes. Verlag J. C. C. Bruns, Minden i. W. 1898.
- 22) Itta Shedletzky: Ludwig Jacobowski (1868-1900) und Jakob Loewenberg (1856-1929- Literarisches Leben und Schaffen) aus deutscher und aus jüdischer Seele 《In: Juden in der deutschen Literatur. Ein deutsch-israelisches Symposion. Hrsg v. Stéphane Moses und Albrecht Schöne, Suhrkamp, 1984, S. 200.
- 23) ebenda, S. 198.
- 24) L. J.: Aus Tag und Traum. Neue Gedichte (1891-1895). Verlag S. Calvary & Co., Berlin 1895.
- 25) Auftakt zur Literatur des 20. Jahrhunderts. Hrsg. V. Fred. B. Stern, Bd. I, S. 412f. を参照.
- 26) Lieber Jaco! で始まっていたものが, この書簡では Geehrter Herr! となっている。上掲書368頁参照.
- 27) 《Der Zeitgenosse》. Berliner Monatshefte für Leben, Kritik und Dichtung der Gegenwart. Herausgegeben und geleitet von Richard Zozmann und Ludwig Jacobowski. C. F. Conrad's Verlag, Berlag, Berlin [1. Oktober 1890 bis 15. September 1891].
- 28) Auftakt zur Literatur des 20. Jahrhunderts. Hrsg. v. Fred. B. Stern, Bd II, S. 14.
- 29) ebenda, s. 109-115. 1896年2月24日付のソネット形式の書簡を含めて五つの未知の詩が Fred. B. Stern によって見つけだされた.
- 30) L. J.: Anne-Marie. Ein Berliner Idyll. Verlag S. Schottländer, Greslau 1895. (Sammlung《 Unterwegs und Daheim 》, Serie II, Bd. 6.)
- 31) R. M. Rilke: Sämtliche Werke in Zwölf Bänden, Insel Verlag, 1965, Bd. 10, S. 305f. 参照.
- 32) Ingeborg Schnack: Rainer Maria Rilke. Chronik seines Lebens und seines Werkes. Bd. 2, Insel Verlag, 1975, S. 936.

- 33) Ludwig Jacobowski : Rainer Maria Rilke, Mir zur Feier. In : Die Gesellschaft, Bd. 16/1, 1900, S. 193.
- 34) 以下に四種を記す。
Aus deutscher Seele. Ein Buch Volkslieder. Verlag J. C. C. Bruns, 1899.
Neue Lieder der besten neueren Dichter fürs Volk. (Zehn-Pfennig-Hefte). Verlag E. Lietzmann & Co., Berlin 1899. [Auflage 100,000.]
Die Blaue Blume. Eine Anthologie romantischer Lyrik. Verlag Eugen Diederichs, Leipzig 1900.
Deutsche Dichter in Auswahl fürs Volk. (Zehnpfennighefte mit Einleitung und Bild.) Verlag G. E. Kitzler, Berlin 1900. Heft I : Goethe. [Auflage 100,000] Heft 2 : Heine. [Aufl. 100,000.]
- 35) Marie Stona : Erinnerungen. In : Ludwig Jacobowski. Im Licht des Lebens. Schlesische Verlags-Anstalt v. S. Schottlaender Breslau, 1901, S. 153.
- 36) Hermann Friedrich : Ludwig Jacobowskis Leben. : ebenda, S. 26.
- 37) 《Die Kommenden》
- 38) vgl. Die Kommenden. Eine unabhängige Zeitschrift für geistige und soziale Erneuerung, 20. Jahrgang, Freiburg i. B. 1966, S. 133.
- 39) vgl. Stefan Zweig : Die Welt von Gestern. Erinnerungen eines Europäers. S. Fischer, 1962, S. 111f.
- 40) 東京大学図書館に収蔵されている鷗外蔵書の中にある。

